

vol.51 2021 夏号 源流からのたより

ぽたい

源流のひとしづく

再 始 動 へ

Key Word

- ふりかえり、さあ 進もう。
- 『川上宣言』から学ぶ “他を思う心”
- 川上村と伝統野菜をみつめて
- あらためて源流人会とは
- 川上第一小学校の石垣
- 森ツアー／源流教室／草刈りボランティア



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

森と水の源流館

奈良県吉野郡川上村宮の平
<http://www.genryuu.or.jp>

ふりかえり、さあ進もう。

春以降も新型コロナウイルス感染症拡大は収まる兆候を見せず、森と水の源流館でも、5月の遠足来館予定の半分近くの学校が延期やキャンセルとなりました。早くかつての日常が戻ってほしいものです。しかし、きっとこれからは、今まで通りでない、新しい日常のわたちが求められることになると思います。「さあ」と気持ちを切替えて20年目の年を進んでいます。

森と水の源流館ができた2002年は、全国の小中学校において文部科学省が定めた「総合的な学習の時間」がスタートした年でした。「生きる力」をはぐくむために、各学校で目標や内容を定め、横断的・総合的な学習等を創意工夫して行うという趣旨です。「総合的な学習の時間」は今も学校現場で設けられていて、その中で森と水の源流館をご利用いただくこともあります。

翌年、森と水の源流館は、『それぞれの源流物語』というビデオをつくりました。「総合的な学習に向けた私たちの願い」という副題がついています。これを奈良県内と和歌山県の紀の川流域市町村の小中学校へ配布しました。当時「よくできているな」と自画自賛したのですが、正直言って、あまり反響は得られませんでした。久しぶりにこのビデオを観ました。今でもやっぱり「よくできているな」と思います。(笑)

今、「私たちの願い」は、当時よりも深く、明確になっているはず。経験も増えています。いつも「トライ＆エラー」の繰り返しですが、その先が大それたと思っています。このビデオも文字通り「捨てたものではない」です。館には一本しか残っていませんが、基本をふりかえりながら、これからの活動にかすための宝だと思います。



もりみずタイムマシンテレビ

上記のビデオをはじめ、これまで、特に開館当初の頃に製作したビデオ番組やテレビで紹介された映像をちょっと昔の横長でないテレビでご覧いただけます。来年の森と水の源流館20周年に向けて、タイムトリップしてみましょう！





奈良教育大学

次世代教員養成センター准教授

中澤静男さん



今号から、源流や水源地に関わる「都市側」

から見た源流の村への思いや視点を紹介していきます。今回は、源流をフィールドにESD※(持続可能な開発のための教育)に取り組んでいる奈良教育大学次世代教員養成センター准教授の中澤静男さんです。

——どんな活動をされていますか。

ESDといって、持続可能な社会の創り手を育む教育に取り組んでいます。川上村では森と水の源流館と協働で「ESD授業づくりセミナー」を行っています。ESDには教科書はなく、源流館の職員に自然環境保全の取り組みや水生生物に関する情報を提供していただき、大学教員が単元デザイン作成に関する助言を行い、現職教員が指導案を作成して授業実践を行う取り組みです。

ESDというのは、人々の価値観と行動の変革を促す教育なんです。価値観というのは、一人一人の心の中にある基準。その基準が変われば行動も変わっていくという事で、一人一人の行動を変えることで世の中を変えていくという下からの持続可能な社会づくりをしています。

——ESDとの出会いは

2007年、奈良教育大学で開かれた、パリ・ユネスコ本部のニードルマイヤーさんの講演です。当時、私は奈良市教育委員会会の指導主事をして世界遺産学習のり

『川上宣言』から学ぶ、他を思う心

ニューアルに取り組んでいますが、これから何をやらなければならないのか悩んでいた時期でもありました。ニードルマイヤーさんは「いくら勉強しても、この社会が持続しないと勉強したことは全部無駄になる。個人の幸せのために勉強することも大事だが、それ以前に社会をよくするための勉強の方がもっと大事」。確かそんな内容だったと思いますが、私の心に「これからの教育はこれだ!」と確信したのです。

勉強は世の中のためになることは、ほんやりと分かっていたましたが、地球の持続可能なための勉強だという発想は全然なかった。これからの教育は、今だけでなく将来性を考え、地球や人類社会がこれからも継

続するために貢献する教育でなければいけないなと思ったのです。川上村の取り組みはまさしくそれですね。

——水源地の村づくりですね。

ダムができるということは、自分の村が沈むことで、奈良県の吉野川分水や和歌山県など、他のところにすごく恩恵を与えているのです。他の人のことをただ思うだけでなく、実際に行動しているところがすごい。それに『川上宣言』の第一条もそうですよね。自分たちは使わないのに、「私たち川上は、かけがえのない水がつけられる場に暮らすものとして、下流にはいつもき

れいな水を流します」。自分のことばかりを言う世の中ですが、川上村は水を通して、無償の愛を各地に送ってくれているようなもので、「利他」の精神なのです。これは、本当にすごいことなんです。

——『川上宣言』は、25年前に作られました。

『川上宣言』は、人々の幸せな社会づくりを目指す「SDGs」そのもの。私がESDに出会うはるか前から、将来性を見据えた取り組みを行っていたのです。上流(源流)の村が下流の村に、美しい水を流しますよという宣言を意識していたら、村の人たちの生活の仕方も変わってくるでしょう。これがESDやSDGsなのです。これを学

ぶことができる村として今後も協働で取り組んでいきたいと思っています。

※Education for Sustainable Development

プロフィール

1960年大阪生まれ。立命館大学文学部史学科卒業、奈良教育大学大学院修了、教育学修士。奈良市立小学校教諭、奈良市教育委員会指導主事を経て、2011年度より現職。

主な著書

- 「学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践」(協同出版…共著)
- 「奈良SDGs学び旅ガイドブック」(奈良新しい学び旅推進協議会…共著)
- 「奈良SDGs学びの旅」(奈良奈良新しい学び旅推進協議会…共著)
- 「Perspectives on education for sustainable development through local cultural heritage」(Routledge…共著)
- 「集団を育てる特別活動」(ミネルヴァ書房…共著)
- 「環境教育とESD」(東洋館出版社…共著)
- 「学べる!世界遺産の本々奈良」(京阪奈情報教育出版…共著)
- 「人生設計能力を育てる社会科授業」(黎明書房…共著)



学生と現役教員のためのESD実践セミナーで森と水の源流館へ引率されたとき(2016年1月)



川上村と伝統野菜をみつめて

―春の伝統野菜と食文化から―

ふたたび 伝統野菜をみつめなおす

1970年以降、大量生産・大量消費による農業の効率化を図った結果、地域で育てられていた伝統野菜が徐々に失われつつある。しかし現在では、伝統野菜の保全をしようとする動きが盛んになっている。ここ数年では、地域固有の伝統野菜を保全することを目的に、京野菜や加賀野菜、大和野菜のように各都道府県で定義づけている地域もある。また、例えばなにも伝統野菜を題材にした歌や絵本など、文化活動を通して知ってもらう（参考1）など、単に野菜の売買だけでない部分で地域の伝統野菜が見直されている。

川上村の伝統野菜に関しては、第49号の『ぱたり』でも言及したが、多くの種類の伝統野菜があると考えられている（表）。今回は、主に春の季節に採ることができる川上村の伝

統野菜に着目して、野菜と食文化に關して少しみつめなおしてみようと思う。

春の伝統野菜

川上村の春の伝統野菜は、トウヂシャ、みがらし、バショウ菜、チシヤ、小菜などが代表的だ。バショウ菜は一般的には高菜で知られており、紀伊半島南部では白ご飯を高菜の浅漬の葉で包んだ郷土料理・めはり寿司としてよく食べられている。また、チシヤなども一般的に知られる野菜だが、川上村では代々タネが引き継がれているものでもある。チシヤは一般的に緑色だが、赤葉のものがあり、緑色の葉のチシヤよりも歯ごたえが柔らかい特徴がある。

今あげた2つの伝統野菜は、一般的に知られている野菜だが、地域で代々育てられているため、食べ方に地域の特徴が出やすいと考えられる。

名称	栽培カレンダー												特 徴
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
みがらし			→ 収穫						種蒔				80℃程度のお湯でぐらせ塩揉みして瓶詰めで保管すると、ピリツと辛みのする漬物になる。
バショウ菜			→ 収穫						種蒔				塩のみで1週間ほど漬け込むと辛味と香りが出てくる。漬物やめはり寿司として食べられる。
小菜			→ 収穫						種蒔				川上村にしかない可能性があるもので、白菜導入前は冬の最も一般的な葉野菜。
チシヤ			→ 収穫						種蒔				収穫時期には1枚ずつ葉を採る。また、川上村では、ご飯と味噌を包んで食べる。
ねぎ				→ 植替		→ 収穫			種蒔				春に1度目の植替えを実施し、6月に根ごと収穫する。収穫した根を干し、2度目の植替えをするサ
とうきび				種蒔						→ 収穫			一般的には「たかきび」。粉にしてもち米を混ぜて搗くトウキビ餅などで食べられる。
トウヂシャ				種蒔						→ 収穫			鉄分が豊富で自然生えで次世代が栽培できる野菜。年中収穫可能で、葉物が少ない夏場に重宝さ
よど豆				種蒔		→ 収穫		種蒔		→ 収穫			いんげん豆の一種で、収穫と同時にタネをまくと秋に2度目が収穫できる。
上平豆							種蒔			→ 収穫			東古野村からタネを持ち込んだものでヒサヨ豆とよく似ているが、さや・豆とも小さい。
ヒサヨ豆							種蒔			→ 収穫			上平豆よりも後に川上村に入ってきた豆。上平豆とよく似ているが、さや・豆とも大きい。

表. 川上村の主な伝統野菜とその特徴

凡例： 種蒔 植替 収穫

奥田 絵
地域おこし協力隊・やまいき市実行委員会



今回は川上村で代々タネが引き継がれている春の伝統野菜を2種類ほど取り上げ、どのような特徴があるのか、野菜の性質や食べ方から見ていく。

伝統野菜とその食べ方

「トウヂシャ」

トウヂシャはフダンソウの仲間、類似した種類にうまい菜などの野菜がある。うまい菜は一般的に知られているものだが、トウヂシャは川上村内で代々タネが引き継がれる、伝統野菜と考えられている。トウヂシャは、一般的に「トウヂシャ」（唐チシャ）という呼び方が定着しているが、川上村内では「トヂシャ」あるいは「トイシャ」と少なまる場合がある。

トウヂシャとうまい菜はフダンソウの仲間、非常に似ている野菜だ。トウヂシャは地面に這って育つ（写真1）。一方、うまい菜はトウヂ



写真1. トウヂシャ



写真2. うまい菜

シャと比べて葉が立って育つ特徴がある。また、うまい菜の方が軸が白く、葉も大きくなりやすい（写真2）。

トウヂシャの育て方は、5月の始めごろにタネまきし、大きくなったら間引いて別の場所に植え替える。トウヂシャは他の野菜と比べても非常に強く、年中収穫できるそう。収穫の際は、外側の成長した葉から順に採取する。トウヂシャもうまい菜も浸しものや煮物にして食べるが、クセがないのが特徴だ。

【小菜】

小菜は川上村にしかない可能性にある野菜で、地域のなかでは「昔小菜」とも呼ばれることがある。戦後に白菜が普及する前には冬から春にかけて最も一般的な葉物野菜だったと言われている。現在では育てている人は少なくなっているが、育った地区ごとでの形や風味



写真3. 小菜

が違う（写真3）。

主な食べ方は漬物で、盆の時期やお寺の行事の際に、古漬けを供えていたと言われている。また、小菜の古漬けなどをご飯に炊き込む「おくもめし」は川上村の郷土料理として知られる（注）。

伝統野菜と食文化

これまで川上村の地域で代々引き継がれている伝統野菜について、詳しく取り上げた2種類の野菜も含め、多くの伝統野菜があることがわかる。現状では、表に記載されている主な伝統野菜の可能性のあるものは、大和野菜として奈良県の伝統野菜に含まれていない。

しかし、今回取り上げた2種類の野菜にはそれぞれの特徴がある。トウヂシャは、他の地域ではあまり見ることができない野菜で、一般的にタネが売られているうまい菜と比べ

ても違いは一目瞭然だ。また、小菜は白菜が導入される前に育てられてきた野菜だが、小菜の古漬けをご飯で炊いたおくもめしは、川上村で郷土料理として扱われている。特に小菜は白菜が川上村に入ってくる前の食料事情を垣間見ることができるとともに、地域の食文化にも影響を与えた野菜であることがうかがえる。伝統野菜を保全することは、地域の食の歴史や文化を保全することにもなることがわかるだろう。

■注釈

おくもめしの「おくも」は塩漬けのことを指す。古漬けは塩分が高いため水出しをした上で、細かく刻んで白米と一緒に炊くご飯のこと（参考2）。

■参考文献

- （参考1）森下正博、2019年、「復活したなにわ伝統野菜」『BIOSTORY』vol.32
- （参考2）川上村婦人団体協議会・川上村教育委員会編集、1989年、『ふるさとの味を訪ねて—奈良県吉野郡川上村から—川上村教育委員会

森と水の源流館はオープン前からこれまで多くの方々にご支援いただきました。そこで、源流の川上村が好

きで集まってくくださったボランティア組織「吉野川紀の川源流人会」も開館と同じ頃に始まります。当初の募集チラシには「かけがえない水を育む豊かな自然を愛している『源流人』が集うところ。話し、遊び、触れ、学び、

るのは、この19年間で源流に集った人たちから海や都市へとつながりが深まっていったからです。

源流地域の自然の魅力、村の暮らしの知恵や工夫を学ぶと同時に、森林の荒廃、過疎化といった問題についても共に考えていくことを「源流学」と名付け、時には会員の方々からアイデアをいただきつつ取り組んできました。

あらためて

吉野川紀の川源流人会

とは

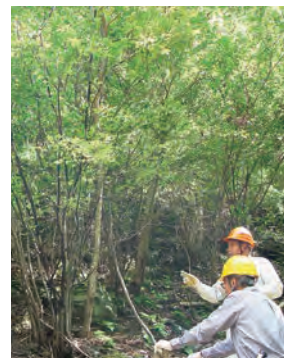


巨樹巡りプレツアー

いただきました。その後はイベント名や形式を変えながらも源流学の取り組みは続いています。川上村の巨樹を巡ったプレツアーもこの一つです。本年も6月12日(土)に「源流学教室」源流学の教科書を作る」として実施し、これまでの取り組みをまとめてみました。詳しくは次号をお待ちください。

同じく、伐採された源流の森を再生させる「源流学の森づくり」も始まります。森づくりとは何?というところから、木を植えて育てるのではなく、自然に育った木を大きくするため

に手を入れて再生を促進しようと試行錯誤し、今に至ります。拠点となる山小屋も皆様の協力を得て建てることができました。風呂や炭焼き窯の増築、シイタケの栽培、獣害対策なども森づくりの中で行いました。



森づくり Before After

これらの経験をきっかけに各地の、そして様々な「源流」で活躍されている方もいます。開館15周年の会員様の座談会で色々とお話を伺いました。これからも源流を守り、源流の新たな担い手を育てる源流人会を皆様と発展させていきたいと思っています。



座談会



これまでの会員特典

考え、喜びを分かち合いながら源流を守り育てていきましよう」と書かれています。本誌裏面と微妙に文面が異なるのは、この19年間で源流に集った人

の開館の翌年、会員様からの要望で、故御勢久右衛門先生を講師に「源流塾」を開催し、吉野川の生態について講義



初期の会員募集チラシ



源流塾

—その三七—

歴史に詳しい職員、成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

川上第一小学校の石垣

『今に伝わる、村人たちの教育への熱いおもいの礎(いしずえ)』

川上小学校の東側に並ぶ西河教員住宅と、しらくら会館の間に立派な石垣が続いています。これはかつてこの場所に建っていた川上第一尋常高等小学校、のちの川上第一小学校の校舎の名残りです。

川上村に小学校ができたのは明治六年(1873年)に寺尾地区に設立されたのが最初で、翌年に東川・北和田・大滝地区にも小学校が設立されました。

また明治15年(1882年)には、土倉庄三郎が大滝地区に芳水館を設立しました。芳水館は土倉家の私的な中等教

育施設でしたが、英語の授業が行われるなど質の高い教育が行われていました。そのため入塾希望者が多く、明治18年(1885年)には隣の西河地区(現在、しらくら会館がある場所)に新しい校舎を建設・移転しています。

現在の教育制度では、小学校6年間、中学校3年間の9年間が義務教育となっていますが、明治19年(昭和16年)1886(1941年)は、小学校が尋常小学校(当初4年、後に6年)と、高等小学校(当初4年、後に2年)の

2種類あり、初等教育の尋常小学校のみ義務教育で、中等教育の高等小学校は、義務教育ではありませんでした。

川上村では明治32年(1899年)に芳水館を仮校舎として川上第一高等小学校が創立。明治41年(1908年)には大滝と西河の尋常小学校と合併し、川上第一尋常高等小学校となりました。

新校舎の建設も進められ、明治45年(1912年)に総工費16,000円(3,000円は土倉庄三郎の寄付)を費やし完成しました。新校舎は県内最高と評された出来栄で、落成式は当時の奈良県知事も出席し、餅が一石(約150キ)も撒かれるほど盛大な式典だったと伝わっています。

その後、昭和16年(1941年)に川上第一国民学校、昭和22年(1947年)に川上第一小学校と校名が変わり、昭和五十八年(1983年)に、村内の6小学校が川上東・川上西小学校の2校に統合されることにともない、その歴史に幕を下ろしました。

この2校も平成15年(2003年)に統合されて川上小学校の1校となり、

令和6年(2024年)には小・中学校を統合した義務教育学校となります。

小・中学校の統合は、川上村の子どもの数が減ったためですが、近年、川上村に移住する子育て世帯が増えているという新しい流れが生まれています。

新しい義務教育学校は「村づくりは人づくり・人づくりは教育」を信念とし、「15の春は正夢に」を目標に掲げています。新校舎の材料には土倉庄三郎が設けた村有林のスギやヒノキを用いるなど、人が減ったから統合という後ろ向きなものではなく、川上村の教育の再スタート、新たな幕開けにしようという意気込みが感じられます。

川上村は今も昔も教育に力を入れている土地柄です。土倉庄三郎が芳水館を設立したときも、川上第一尋常高等小学校に県内最高の校舎が建てられたときも、きつと同じような意気込みをもってあつたのでしょう。

今は基礎の石垣しか残っていませんが、その前に立つと、今も昔も変わらない川上村の人たちの教育に対する熱いおもいが伝わってくるようです。

参考文献

百年史編纂委員会編 1977『百年史』川上村立川上第一小学校

田中淳夫 2012『森と近代日本を動かした男…山林王・土倉庄三郎の生涯』洋泉社



図1 川上第一小学校の石垣

図2 川上第一尋常高等小学校の校舎と児童
(大正～昭和初期)

今までは違う視点で

水源地の森ツアー 4月25日(日)
オンライン源流教室 6月3日(木)

普段通りが必要ですが、世間全体が新しい仕組みづくりへと向いている今が再始動のチャンスと捉え、折角だから工夫してみよう！ということで、受け手側の視点を大切にできるよう、水源地の森ツアーとオンライン源流教室で実施した工夫を紹介します。

水源地の森ツアーでは、それぞれが感じた「おもしろい」を共有してもらいました。かねてから、ツアー中の解説よりも昼食後の観察タイムの方が参加者さんの反応がよいように感じていました。ツアー中の解説は、いわば教科書の様なもので、伝えたい事が一方通行になっている節がありました。今回は、「見つける」面白さを伝えられるよう心掛け、観察タイムでは「気づき」を返してもらえよう、心にグッときたものを探してもらう自由時間を設けました。それぞれの見つけたグッときたものは、巨樹からの木漏れ日、風にざわめく葉の音、絶え間なく変化する水面のきらめき、森の香りなど、五感で感じられる魅力に富んでおり、樹木や昆虫など、そこに在るものの名前を知らなくても、水源地の森という空間を楽しむことができることを伝えてもらえました。水が生まれる場所に足を運ぶだけで様々な気づきが生まれることを、今回のツアーから学ばせてもらえました。



巨樹の「グッときた」もの探し。木漏れ日、新緑の瑞々しさ、巨樹の力強さ等の意見が出ました。

オンライン源流教室では、「昆虫が嫌いな理由」を共有することから始めてみました。昆虫嫌いの子どもにどうやって興味を持ってもらうか。昆虫の授業では常にこの課題が付きまといまいます。嫌いの理由は「気持ち悪いから」「脚が多いから」「変な動きをするから」などという相手のことを良く知らないことから生まれる苦手意識が原因となっていました。「クラスの友達とどうやって仲良くなった？相手の事を良く知ったら友達になったのと一緒で、昆虫の事を知ったら、昆虫嫌いでも平気になれるよ。」この一言で教室の雰囲気は変わりました。そこから目を輝かせて話を聞いてくれるようになり、積極的に疑問や質問を投げかけてくれるようになりました。その日の夕方、授業の御礼のお手紙が届けられ、前年度とは比較にならないほど昆虫に興味を持ったという感想が寄せられました。

「面白い」や「嫌い」それぞれが感じた視点を共有することで生まれる一体感を大事にできるよう、今後も工夫をしていきたいと思っています。

奈良県、和歌山県からの12人の参加者で実施しました。森と水の源流館が管理する一区画（見本園）の草刈りと白屋地区の自然観察を行い、併せて前回に引き続き侵略的な外来種（主にナルトサワギクとアメリカオニアザミ）の駆除を実施しました。見本園には、自然に生えてきたパイオニア種の樹木を少し残してきました。今年はクワの実がたわわに実っていました。草刈りの合間に甘酸っぱいごぼうも楽しみました。

後半の自然観察と外来種の駆除では、参加者のみなさんでアメリカオニアザミのトゲの危なさをじっくりと観察し、相手をよく知った上で駆除作業を行うなどして作業を行いました。

終了後「白屋で環境保全活動を行えたこと、それにみなさんとの出会いがとてもうれしかった」といううれしい感想をいただきました。参加したみなさんも笑顔で感想を共有していきました。水源地の村づくりは川上村に集まるみなさんの協力のおかげもあって、キラリと光る村づくりになっています。今後も活動を通じて交流の輪を広げていきたいと思っています。



源流人募集



源流人とは かけがえない水を生む源流の自然とそこから海や都市へとつながる様々なものを愛する人です。

源流人会とは 集い、話し、学び、遊び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。

2021年度更新特典は川上村の自然をドライフラワーでお届け！

年会費
個人 2,000円
家族 3,000円
学生 1,000円
団体 10,000円

郵便振替 00940-1-331163

もりもり 森守募金

にご協力ありがとうございました。

令和2年度は、130,846円の森守募金をお預かりし「水源地の森」啓発パンフレットと啓発看板の作成を行いました。

源流域の環境保全はみなさまの善意に支えられています。ひきつづき、ご協力をお願いいたします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

